様　式　C－19、F－19、Z－19　(共通)

科研費 KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 26 年　 6 月 27 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520128

研究課題名（和文）近代日本人作曲家のフランス音楽受容に見る異文化理解と伝統の創造

研究課題名（英文）comprehention of the different cultures and creation of the tradition in reception of the modern french music by the modern Japanese composers

研究代表者

神月　朋子（KOZUKI, Tomoko）

埼玉大学・教育学部・准教授

研究者番号：70375591

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　 1,600,000円、（間接経費）　 480,000円

研究成果の概要（和文）：池内友次郎、平尾喜四男らの作曲家の体験をもとに、太平洋戦争前の日本の音楽状況から形成されたフランス音楽観を整理した。
フランス音楽受容には、アンチ・ドイツ音楽という消極的な理由だけでなく、同時代音楽の動向を探って日本の近代芸術音楽を創造するという、積極的かつ重要な動機があったことを明らかにした。音楽においても他の芸術や文化、産業等と同じように、フランス近代の文化は、ドイツやアメリカとは異なる新たなモダニズムを提供したのである。
以上の研究の結果、、近代日本人作曲家が、昭和戦前期までに、日本人による洋楽想像がどのようなものであったか、その際、東西の共通性と相違性の対立・融和の試みの一端を示した。

研究成果の概要（英文）：This study arranged that the French modern music view formed from the music situation of Japan before the Pacific War, was based on the experiences of Tomojiro Ikenouchi and Kishio Hirao and others. It was shown clearly that there were positive and important motives, exploring the French modern music trend, not only the negative reason of anti-German music, but simultaneously creating one of the new Japanese modern art music by acceptance of the French modern music. Also in music, the culture of such modernization offered different new modernism from German classical music or the educational methods of the United States, like other arts, cultures, industry, etc.
As a result of this research, Western music imagination according to Japanese people by a Showa prewar-days term was clearly studied, and also the purpose of the trial of confrontation and reconciliation of the similarity and difference of East and West, and thus, the nature of this trial was shown.

研究分野：芸術学

科研費の分科・細目：音楽学

キーワード：近代フランス音楽　日本の洋楽受容　アンチ・ドイツ　新たなモダニズム　日本の近代化との連携

１．研究開始当初の背景

明治以降の洋楽受容に関する研究は、音楽学において近年著しく発展している領域の 1 つである。本研究に特に関わる分野を見ても、アメリカ音楽との関連については『国家と音楽－伊澤修二がめざした日本近代』（奥中康人、2008）、ドイツ音楽との関連については『楽聖ベートーヴェンの誕生－近代国家がもとめた音楽』（西原稔、2000）、東京音楽学校との関連については『東京芸術大学百年史』（1987）や「東京芸術大学創立 120 周年企画」（2007－8）、「東京音楽学校の諸活動を通して見る日本近代音楽文化の成立」（2008－09 年度科研共同研究、代表大角欣矢）、「シンポジウム・『東京音楽学校』を考える」（洋楽文化史研究会、2009－）などが挙げられる。これらの研究は、アメリカやドイツの音楽が受容され、日本化されたことによって、日本の近代国家と社会、文化の形成に深く関与したことを指摘するものである。

これに対して、フランス音楽の受容に関する調査研究は、質量ともに十分であるとは言い難い。フランス音楽との関わりは陸軍軍楽隊から始まり、1930 年代以降はフランス近代音楽をモデルとする作曲家や、フランスに留学する作曲家や演奏家が増え、フランス派と目される一派を形成するまでにいたった。その影響はきわめて大きく、戦後から今日にいたる日本の作曲・演奏・研究活動および大学・学校等の教育活動の大きな柱となってきた。その実際についての研究は、文学者たちの西洋音楽受容研究の一部として本格的に始まり、『西洋の音、日本の耳』（中村洪介、1987）以降いくつかの報告が続いている。他方、フランス音楽に特化した受容研究は近年になって本格化し、「日本とドビュッシー」（笠羽映子、1987）など笠羽の 1980 年代のいくつかの論考を始めとして、「昭和戦前期における日本人作曲家のドビュッシー受容」（佐野仁美、2004）や『日仏交感の近代』（宇佐美斉他、2006）などが出ている。

これらの研究は、事実関係の調査と整理を行ないつつ、その特徴を明らかにするものが多いが、他方で、作曲技術習得の意義を限定的にとらえるもの、アンチ・ドイツ音楽の拠点として限定的に価値づけるものなど、フランス音楽受容の意義を発展的に把握するという課題が残されている。また、日本の洋楽受容史に位置づけて評価する包括的研究もまだ行なわれていない。

２．研究の目的

(1) 作品分析を行ない、フランス留学を通して作曲家達がどのように同時代のフランス音楽を受容したのか、それによっていかなる独創的な表現や音楽理念を得たのか、その葛藤と内省のプロセスと成果を明らかにする。

(2) 作曲家達のフランス音楽・文化受容に関する著作を分析し、作品との照合を行なう。

(3) 日本伝統文化および音楽の特徴を概観し、作曲家たちの課題であった日仏文

化間にある異質性と融合性の問題を検討する。

(4)同時代の日本におけるフランス音楽理解を明らかにし、留学体験との比較を行なう。

(5)文学と美術でのフランス受容研究を参照し、当時のフランス文化理解を確認するとともに、分野による特徴と違いを指摘する。

(6)作曲家達が提示した表現と音楽理念が、同時代および戦後の芸術音楽の展開に対して果たした役割と意義を、「伝統の創造」（E.ホブスボウム）の観点から考察する。

３．研究の方法

(1)フランスに留学した作曲家を取り上げ、留学以後の作品を中心に収集し、分析を行なう。

(2) 彼らのフランス音楽・文化受容に関する著作を分析する。

(3)日本伝統文化とフランス音楽との異質性と融合性に関する彼らの探究を考察する。

(4) 国内の音楽雑誌記事と楽書（翻訳を含む）を収集し、フランス音楽に対する当時の理解を明らかにする。

(5)同時代の文学と美術におけるフランス受容研究を参照する。

(6) 上記を総合的にふまえ、フランス音楽受容の意義を発展的にとらえ、洋楽受容史に位置づける。

４．研究成果

22(2010)年度

平尾貴四男を取り上げ、その言説を中心に、詳細な分析と考察を行なった。

それによれば、フランスで得たのは、作曲が確実で堅固な技術を土台にしてなされること、またそれと自由な即興が関わりあって行なわれることである（池内)。

他方、現代までのさまざまな音楽を糧としつつ、作品はそのいずれとも似ない作曲者の心の反映であり、真に目指すべき音楽としての音楽的真実を生む。民族性の強調ももはや必要なく、作曲者が自己に忠実であれば当然民族性もそこに反映されるのであり、輸出向きの典型的民族性は世界の音楽に貢献しない（平尾)。

すでに世界音楽のるつぼであったパリに身を置くことによって世界の音楽に心を開きつつ、自己の自然な民族性を生かした、論理性と抒情性をもった音楽の創作を目指していることが明らかになった。この自然な民族性とは、表現を極限まで切り詰め、抽象性を高めながら事物の本質を一瞬のうちに表すこと、静と動が両立する表現世界を展開することであり、日本の伝統文化で表されてきたものである。

これはフランス音楽の特質とは一致しない面が多いが、彼らはそれらを生かしつつ、フランス音楽教育の特質である正確かつ美的な作曲書法の徹底的な習得と、19 世紀フランスのナショナリズムの音楽上の反映である、もっとも高度な民族主義による音楽創造を試みた。それは、当該民族の音楽に固有な様式や形式といった根本的要素に音楽を還元し、そこからアイデンティティにもとづく創作を行なうことである。

こうして音楽においても、政治や文学等と同様、日本人にとってパリの意味は公から私へと変容し、文化の領域で交流が深まっていったことが示された。そして洋楽導入から 100 年たって武満徹にまで至る、日本近代芸術音楽の新たな伝統が創造されたことが明らかになった。

23(2011)年度

今年度も作曲家の平尾貴四男を取り上げ、その言説を中心に詳細な分析と考察を行なった。本研究の特色と独創的な点は、従来の断片的な研究とは異なり、平尾に関するほぼすべての資料を収集し、その詳細を分析し、異文化体験の根源について考察を行ったことにある。特に彼

がフランスで何をどのように学び、対峙したのかを明らかにしようとした。 まず、留学前の日本の音楽界で形成されたフランス音楽観を確認した。ドイツと違って同時代の音楽が日本に紹介され、軽さや華やかさ、はかなさ、簡潔さ、明快さ、自然とのつながりが着目され、新しい音楽のイメージをもたらした。感覚と意識は表裏一体であり、ともに静態的ではなく動態的なのである。そして、国家とではなく、各個人の音楽観と親密で個人的な関係を作り出していった。これは、日本が得た新しい音楽像である。

これを背景とした、平尾の異文化体験について、以下に焦点を絞って考察した。彼は 30 年代にパリに留学し、世界の音楽を鳥瞰しつつ、自己の自然な民族性から生まれる、論理性と抒情性をもった音楽を創作しようとした。その方向性を明らかにし、戦前から戦後にかけての日本の作曲界への影響を考察した。

まず音楽院で得たのは、きわめて厳格で緻密なメソッドによる作曲教育と、同時に響きや表現の美しさも重視する姿勢であった。また、対位法を通じて、調性とは異なる自由な表現方法を得た。次に、当時のパリの音楽状況から得たのは、1920 年代の残滓の感じられる世界音楽の息吹であった。これは、現代の音楽状況の先駆けでもある。それは芸術だけでなく、民族の日常生活に根差した文化的基盤のある音楽であった。

今後の課題としては、こうした世界音楽を体感し、それをどのように融合・対立させるか、とりわけ日本の伝統音楽とのかかわり方を平尾がどのように表現したのかを解明することが挙げられる。

24（2012）年度

今年度は、これまで研究してきた池内友次郎、平尾喜四男などの個々の作曲家の体験を踏まえて、彼らの留学前、すなわち太平洋戦争前の日本の音楽状況から形成されたフランス音楽観を改めて整理した。

フランス音楽受容には、アンチ・ドイツ音楽という消極的な理由だけでなく、同時代音楽の動向を探って日本の近代芸術音楽を創造するという、積極的かつ重要な動機があったことは明らかである。言い換えれば、音楽においても、他の芸術や文化、産業等と同じように、フランス近代の文化は、ドイツやアメリカとは異なるモダニズムを提供するモデルとされたのである。

今後の課題は、フランス音楽の特質、特にフランス近代の文化のそれを探ること、また、これと対峙する日本の作曲家たちが背負っていた日本文化の本質も探ること、さらに彼らがどのように両者の対峙と融合という、古くて新しい問題に対処したのかということがらについて、新たな見解を提示することである。これは、平成２２年度の研究成果の一部をさらに展開し、新たな知見を得ることである。

以上を踏まえて、近代日本人作曲家が、昭和戦前期までにどのように両者を対立・融和させようとしたのか、その活動と成果の一端を示した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２　件）

①神月朋子　「平尾貴四男によるフランス音楽受容——異文化理解と伝統の創造」（『埼大紀要』査読なし、2013、第 62 巻 1 号、p.215-226）

②神月朋子　「近代日本芸術音楽創造に対するフランス音楽受容の影響試論」（『埼大紀要』査読なし、2011、第 60 巻第 2 号、p.249-260）

〔学会発表〕（計　１　件）

①神月朋子

「平尾喜四男におけるフランス音楽受容——異文化理解と伝統の創造——」

日本音楽学会第 62 回全国大会

2011（23）年 11 月 6 日　東京大学駒場キャンパス

〔図書〕（計　０　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　０件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

６．研究組織

(1)研究代表者

神月朋子（KOZUKI, Tomoko）

埼玉大学・教育学部・准教授

研究者番号：70375591

(2)研究分担者

（　　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　　）

研究者番号：